

神奈川大学人文学会五〇年史に代えて

つれづれに思い出すことども

——三〇年前の人文学会総会——

橋 本 侃

「人文学会」の思い出の一つに、神大に來たばかりの昭和四八（一九七三）年に、総会で討議された原稿料問題というのがあります。これからのお話はちょうど三〇年前のもので、外国語学部創立八年目のことです。この年、人文学会は発会二〇年目を、大学の附属機関である人文研究所のほうは九年目を迎えました。

当時の人文学会・人文研究所は九号館の二階、いまの日本常民文化研究所（その前は経済貿易研究所）と同じ位置にありました。ちなみに、学部教授会は、（略称）人文研の並びにあった旧語学研究所内で行われました。当時の構成員は総計で五八名、そのうち英語英文学科に十九名、スペイン語学科に八名、その他の部門に三十一名がおり、現在のおよそ二分の一の数でした。

学科の専門科目のほとんどが十一号館の授業でしたので、休憩時間は近場の人文研に出向きました。広々とした人文研の大テーブルに資料・書類を山のように積み上げて陣取っていたのが社会科学の分野で有名なA教授でし

た。人文学会の生みの親と目された方です。それに、昭和四十三（一九六八）年から始まった学園紛争の最中に学長代行を務めたことのあるB教授や、言動のすべてが民主化闘争の闘士然としていたC教授も常連でした。

その場の雰囲気はノンポリの新任英語屋ごときが軽々しく声を掛けられるようなものではありませんでした。一つには、外国語学部の前身は人文学会であった、という矜持を持たれているのが有力教授たちであり、全学の十七名の教授有志で二十七（一九五二）年に発会された「近代思想研究会」の精神を受継ぐ気鋭の学者たちでもあったわけです。学問的業績を着実に上げているか、神大の民主化闘争の精神を体现しているか、この二つのうちのどちらか一方が――まれに両方が、オーラのように放たれているのが人文研に集まる学部の重鎮とされている先生方でした。

確かに、当時の学部内には紛争の有形無形の影響が根強く残っていましたので、教授会の席上で発せられる意見や感想には必ずなんらかの微妙な表現上の含みがあり、紛争時代にどのような役割を演じたのが判らぬ新人には、その真意が伝わらぬ場合が多かったように記憶しています。時には、議論が単なる議論で終わらないで、次第に激しさを帯び始め、紛争時代にさぞや大変だったであろうと想像できる場合が数多くありました。

そのような状況で、教授会の終了後に学会の総会がありました。今も昔も、『人文研究』は稿料が出る唯一の研究雑誌です。学部の教員が全学の一般教育を支えているという理由から、全学生から人文学会会費を徴収し、その事実上の財源を確保することができるようになったのはA教授の功績だそうです。

一人の論者が「どの投稿者にたいしても稿料を均等一律払いにせよ。さもないと財政的な破綻が数年の内に生じる」と口火を切りました。すると一人が「従来どおり、一頁の基本額に原稿の枚数掛けるが当然だ」と力説しまし

た。すると、もう一人は「論文・書評・翻訳などの内容によって一頁の基本額を設定して、総枚数を掛けるべし」と加勢しました。いずれも人文科学と社会科学の分野の先生方でした。確かに、この分野の先生方は紀要に数多くの論文を毎号のようにものされていたという記憶があります。

以下に続く論者もそれぞれが属する研究分野の利害を代表しての発言の様子でした。その頃の図書費予算も、教員の頭割りなどという発想などありませんでした。それよりも、有力教授の多い学部ほど大規模な予算を要求し、そのままに決定されました。外国学部でも、学科の充実をはかるよりも、全学生を教える一般教養の部門のほうが個人当たりの予算が潤沢にあった時代のことです——これらすべて、いまから三〇年も昔のことです。

〔注記…基礎資料については澤木経営企画室長と相良・高橋両課員にお世話になりました。この場を借りて感謝いたします。〕